

拓く

29

研究者

(36歳)

熊田陽一氏 京都工芸繊維大学大学院准教授

化学工学を専門としつんだ応用展開を考えてい
つ、抗体の固定化に取り組む「抗体を微生物で量産し、配列させること」につ
いて、生体分子工学専攻で積極的に研究領域を広げて
いる。「生体材料を作るテ
ーマだが、産業利用が現実
的なコストで見合うように
している。それをサイエン
スの部分に立ち入りつつ、
工学のエッセンスを盛り込
んだ。所属は岡山大学で3年

間のうち、2年目を終えた
ところ、京都工芸繊維大学
に採用が決まった」。歩ん
だ道は「王道」でなくとも、
努力と縁で道を切り開いて

きた。神戸大、岡山大で出会っ
た2人の師の存在が自身の
研究者人生にとって好影響
をもたらしした。「論文を言

む文章構成を学んだ神戸大
の加藤滋雄先生、研究の粘
り強さを教えられた岡山大
の中西一弘先生。2人とも
退官が近い先生だったが熱

いう。自らも現在は研究室のナ
ンバー2。学生との距離は
近く、研究室の教授からは
ある程度の運営を任せられる

と診断材料の開発だ。その
先を見据え「たんばく質の
コストを下げた生産と機能
を発揮できる固定化。これ
にこだわりたい」と力を込
める。

微生物で抗体量産・配列化



心な指導を受けた」と回顧
する。

教員は競争の激しい世界
でもある。「研究室を守
り、学生を指導し、競争的
資金を獲得しなければなら
ないが、発想力は若手の方
があっても豊富な知識と経
験値が違う。体力勝負だけ
では物事がうまくいかない
ことを痛感させられた」と

立ち位置だ。「草野球の選
手兼監督の気持ち。学生の
進学や就職に気を配りつ
つ、論文や学会の準備をし
なければならぬ。バランス
に配慮しつつ、時には自
分が代打で出る必要があ
る」と率直な胸中を明か
す。

今後狙うのは抗体を使っ
たインフルエンザ、がん

モットーに「自分の目で
確認して方向性を決める。
それだと確実なものを残せ
る」という信念がある。だ
からこそ研究テーマは流行
に左右されず根底の発想を
大切にしている。昨年、女
の子が誕生した。保育所へ
の毎朝の送り届けは自身の
役目。研究室だけでなく、
家庭での役割が増えつつあ
ることも研究の糧になりそ
うだ。

(大阪・林武志)
(水曜日に掲載)

科学技術・大学